

実施報告書

HT26115

病気別の食事を考えた自分カルテ作り
～人形のおなかを見てさわってきいてみよう～



開催日：2014年7月26日(土)

実施機関：関東学院大学 金沢八景キャンパス(E6号館第2実習室・413会議室)

実施代表者：永田 真弓
(所属・職名) (看護学部・教授)

受講生：小学校5年生・6年生 16名

関連URL：<http://kango.kanto-gakuin.ac.jp/1680/>

【実施内容】

1. プログラムの目的

本プログラムは、科研費による研究を通じて作成した小児がん治療中の子ども(小学生)の食生活を支援するプログラムをアレンジし、受講者が食事と栄養、健康な子どもでも風邪を引いた時に生じる発熱や吐き気などの症状出現時の食事、消化管に関する基本的な知識を学び、生じやすい症状について自分の体の状態に合った食事対策について考えることを目的とした。

受講者である小学生には難しいと思われるような、体のことや食事のことでも、楽しみながら知ること、子どもでも「セルフケア/セルフマネジメント:自分の体や生活を、いい状態にしようとする事」ができることを体験してもらう機会とした。

2. 研究成果を分かりやすく伝えるために留意した点

・科研費により作成した小児がん治療中の食生活支援プログラムの電子版リーフレットは、小学生を対象としていたため、講義「食事と栄養、食事と症状について」は、その電子版リーフレットを可能な限り活用し、講義内容のアレンジは最小限にした。

・受講者が小学生であることを念頭において、集中できる時間や講義と実習の組み合わせを考慮し、1つの講義時間や体験・実習の時間は30分以内とし、講義した内容をすぐに体験・実習できる構成にした。

・体験・実習にシミュレーター人形を用い、テーマにあるように「触って、見て、聴いてみよう」の感覚を通した人体の解剖や機能に関する学習機会を多くした。

・受講生は3～5名のグループ編成とし、各グループに1名の教員を配置することで、疑問や質問等に対応できる体制を整えた。

・基本的な学習を終えたあとの復習には、○と×のコーナーを移動して身体を動かしながら答える○×クイズを使用し、学習方法にメリハリをつけた。

3. 受講生が活発に活動するために工夫した点

- ・夏休み期間中の活動や宿題等に活用できるように配慮し、開催時期を7月末にしたところ、自由研究に活かしたいという受講生の声が聞かれた。
- ・少人数によるグループでの体験・実習を行うために、実習室内でシミュレーター人形と座席との移動を繰り返す形式となったが、キャラクターによるグループ分けをしたことで、スムーズに移動が行われ、1グループ毎のシミュレーター人形を用いた体験・実習の時間が、十分に確保できた。
- ・腸音を聴診する体験・実習では、プライバシーに配慮し、受講者同士で聴診しあう方法ではなくシミュレーター人形を使用したところ、シミュレーター人形を通じた体験・実習を行った後、受講生は自らの腹部を聴診して確認したり、シミュレーター人形の他の身体部分に関する興味・関心を持つ姿がみられた。
- ・シミュレーター人形を使用しない時には、1人に1冊の人体図鑑仕掛け絵本を配布し、見てもらうことで、これまでの学習内容の復習のみならず、本プログラムで学習した消化管以外の人体に関する興味・関心をもつことに繋がっていた。
- ・自分カルテの作成では、受講生に起こりやすい症状を連想してもらうことや学習してきた資料を活用することにより、症状出現時の食事対策が具体的に考えられていた。また、鼻が詰まる、鼻水が出る等講義では触れなかった内容の発表もあり、講義の内容を応用して自分なりの食事対策をよく考えていた。
- ・受付から開講式までやクッキータイムでは、緊張を緩和するとともに、グループ活動がスムーズに行われるようにアイスブレイクを実施した。自分カルテの発表は、各グループ2名をランダムに指名して行ったが、皆堂々と発表をしていた。また、発表者には、受講者だけでなく見学していた保護者からも大きな拍手が送られるなかで、学びが共有できた。

4. 当日のスケジュール

- 13:00～13:30 受付:金沢八景キャンパスE6号館第2実習室に集合
アイスブレイク
- 13:30～13:45 開講式:挨拶、オリエンテーション
科研費の説明(日本学術振興会 石川義弘 研究員)
講師紹介
- 13:45～14:15 講義「食事と栄養、食事と症状について(講師:永田真弓)」
- 14:15～14:45 グループに分かれて体験・実習「しかけ絵本とモデル人形を使って、消化管を観察してみよう」
- 14:45～15:00 休憩
- 15:00～15:30 講義「腸音(ちょうおん)とそのきき方について:(講師:飯尾美沙)」
- 15:30～16:00 グループに分かれて体験・実習「聴診器(ちょうしんき)を使って、シミュレーター人形のおなかの音をきいてみよう」
- 16:00～16:15 体験・実習「おなかがいたいときはどんなものを食べたらいいかな?～症状別食事対策クイズ～」
- 16:15～16:25 休憩:金沢八景キャンパスE6号館会議室に移動
- 16:25～16:45 グループに分かれてクッキータイム&質疑応答、アイスブレイク
- 16:45～17:10 グループに分かれて体験・実習「症状別食事対策:自分カルテを作ろう」
自分カルテ発表:各グループ2名
- 17:10～17:30 修了式:アンケート記入、未来博士号授与、記念撮影
- 17:30 終了・解散

5. 実施の様子



写真:人体解剖仕掛け絵本で消化管の観察



写真:作成した自分カルテの発表

6. 事務局との協力体制

・本プログラムの企画準備から実施にいたるまで、総合研究推進機構運営課研究支援担当および看護学部庶務課と適宜連絡を取り合いながら、委託費の管理や日本学術振興会との連絡調整、受講生の保険加入手続き、会場の温度設定、アンケート集計等の協力を得て、円滑な遂行にむけた運営体制を整えた。

・広報室および他の関係部署の協力のもとに、本事業のPRを行った。

・開催日1週間前にプログラム運営に関する打ち合わせを行い、各々の役割分担を確認した。同日のリハーサルでは、プレゼンテーション内容やシミュレーター人形・机・椅子の配置等を修正したことで、当日はスムーズにプログラムを実施することができた。

7. 広報活動

・「かながわサイエンスサマープログラム」(神奈川県)、大学ホームページ、「JS日本の学校」(株式会社JSコーポレーション)の「体験イベントin大学」サイト、神奈川新聞web版カナロコ(神奈川新聞社)、朝日新聞神奈川マリオン(朝日新聞社)を通して広報を行った。

・6月に開催された学内イベント、スポーツフェスタにてポスター掲示と案内チラシを配布した。

・近隣駅6箇所に、募集案内ポスターを掲示した。

・附属の関東学院六浦小学校には、案内チラシの配布を依頼した。

8. 安全への配慮

・受講者にはレクリエーション保険に加入させた。

・受講者が使用した聴診器を別の受講者が使用するときには、必ず教員が消毒した後に手渡すようにし、衛生面に配慮した。

・熱中症予防については、案内状に水筒持参の旨を記載した。また、当日は貼り紙で注意喚起するとともに、休憩場所の確保等対策を講じ、受付にも飲料水を用意し、講義の休憩時間にも水分補給を促した。

・医務室と事前に連絡をとり、受講者の急な体調不良時の対応に備えた。

9. 今後の発展性、課題

・クッキータイムの頃にはグループ内の受講者が打ち解けていたが、受付後はグループで着席していたため、講義前のアイスブレイクでは、グループ全員が揃うまで自己紹介ができなかった。全員が揃わなくても実施できるアイスブレイクや着席方法について、再検討する必要がある。

・帰りのバスがない時間帯での終了・解散となったため、今後は開始時刻を午前中に早め、昼食を挟むことで、バスの乗車が可能な時刻に終了できると考える。また、午前中からの実施により、昼食を導入することでは、受講者同士が打ち解ける時間を早めることができると推察する。

・今回は、学内に看板を設置したのみで、誘導員は配置しなくてもアクセスに関する混乱はなかったが、正門等に誘導担当を配置することにより、受講者が来校時の教室への誘導や、帰宅の際のバス停への案内がよりスムーズになると考える。

・シミュレーター人形を聴診する際の聴診器は、1グループに2個と教育(二人)用聴診器1個を準備していたが、聴診する前の聴診器の使い方の説明時や受講者自身の腹部の聴診が同時に使用可能なように、受講者の人数分の聴診器を準備すると、より効果的に聴診の体験・実習が展開できるといえる。

・本学部は、開設2年目であり、聴診等の基本的な知識・技術を修得した学年の学生がいないことから、学生の協力は得なかったが、今後は、学生にも協力を得ることで受講定員数が増加可能となり、その受講者増分に対応していくことができると考える。また、学生が実施協力者になることによって、看護の基本的知識・技術の獲得にも繋がると考える。

・作成した小児がん治療中の子どもの食生活を支援するプログラムは、8~12歳の小学生を対象としているため、今後は本プログラムの対象年齢を小学3・4年生に引き下げ、実施することも可能と考える。

【実施分担者】

飯尾 美沙 看護学部 助教

清水 裕子 看護学部 助手

橋浦 里実 看護学部 助手

【実施協力者】 _____ 0名

【事務担当者】

狩野 奈皇子 総合研究推進機構運営課係長